

自重互敬

三村希一郎
昭和40年卒

(半切33.7cm×129.6cm)

美術品ではないが、校宝ということで紹介する。この書を揮毫したのは明治から昭和にかけての哲学者・教育者・政治家である安倍能成。明治16年愛媛県松山市に生まれ、松山中学から第一高等学校・東京大学哲学科へ進む。大学卒業後、慶応大学二高、法政大学及び京城大学の講師や教授を歴任している。戦後は、文部大臣として教育制度の改革に尽力した後、82歳で没するまで20年間学習院院長を務めた。この書の揮毫は、昭和33年の秋。当時の原田親校長・河田二白先生(書道)及び書道部の生徒二人が見守る中、宿所の荒手茶寮においてである。なお、その生徒は、曾我英一(昭和58年から平成13年まで朝日高の書道教諭)と小倉富子(旧姓延永)の両氏である。二人の話によれば、当日夕方、河田先生に連れられて荒手茶寮に行くと、原田校長は既に到着していて、風呂上がりの安倍院長と待つておられた。さっそく持参した墨をすり揮毫してもらったが、大先達を前にして、原田校長をはじめ非常に緊張した面持ちで言葉もほとんど交わされなかったそうである。それ以来今日に至るまで、大講堂にこの書が掲げられている。また、朝日高初代の原田校長も事あるごとに「自重互敬」を生徒に説かれたため、校訓のようになったのは「承知のとおりである。」

【三村希一郎(昭和40年卒)】



展示場所 / 大講堂

「自重互敬」

あべ よししげ
安倍能成



(ブロンズ 高さ170cm)

「鳥のある長い髪の女'78」

ひるた じろう
蛭田二郎

蛭田氏は茨城県出身の彫刻家で、精妙かつ感性豊かな作風で、多くの女性像や、桃太郎大通り沿いにある「ももたろう」シリーズの彫刻群など子どもの世界を扱った作品を発表されています。長く岡山大学や倉敷芸術科学大学などで教鞭をとられ、多くの後進を育成されています。平成8年の日展で文部大臣賞受賞、17年に日本芸術院会員になりました。

この作品は昭和53年の日展に出品されたものです。昭和58年に、卒業生の保護者の方から匿名で寄贈されたもので、希望により、多くの生徒が出入りする旧図書室に展示されました。当時は「湖畔にて」という名前で呼ばれており、設置場所とあわせて、そう記憶されている卒業生の方も多いためですが、数年前作品の来歴を調べている際に誤りに気づき、現在は、正式な作品名「鳥のある長い髪の女'78」で、新しく完成した図書館の正面中央部に飾られています。

住まいを移した作品を実際に見てみると、天井部分から差し込む日差しが遙か遠くを見据える女性の姿を明るく包み込み、そのみずみずしさというか、若者だけが抱くことのできる未来への希望とでもいうものが、また、この場所で見えがえった感があります。

【武内克之(昭和58年卒)】



展示場所 / 図書館

実は、これらの作品は、母校に寄贈されたもののほんの一部にすぎません。学校でも定期的に入れ替えを行っているようですが、スペースが限られていることや維持管理の難しさなどから、全ての作品を展示して紹介することは難しいとのことでした。

また、機会を見つけて、会報等により、いろいろな作品を紹介していきたいと思ひます。